

## 家族・私有財産・および見栄の起源

### —『有閑階級の理論』の研究—

## The Origin of the Family, Ownership, and the Propensity of Emulation

### —A study in “The Theory of the Leisure Class”—

小谷 敏\*

Satoshi KOTANI

#### 〈キーワード〉

誇示的消費, 誇示的閑暇, 代行的消費, 代行的閑暇, 野蛮文化,  
ヴェブレン, アドルノ, 見栄, 金銭的文化, 消費記号論

#### 〈邦文要約〉

人々の日常性への注目という志向性と、行為の意味の解明という問題意識において、ヴェブレンとシンボリック・インタラクショニズムは共通項をもっている。ヴェブレンは、アメリカの新興成金たちを分析する事で、「人間の経済活動の根底に横たわる動機としての見栄」という興味深い観点を導き出している。生活上の利便、もしくは効用の充足以外のところに消費の動機を求めた点において、『有閑階級の理論』は1980年代的な消費記号論の先駆をなすものである。「誇示的消費」、「代行的消費」等のヴェブレンの概念は、今日の消費社会をめぐる議論にも登場してくる。ヴェブレンは、高度な資本主義社会における文化のあり方を金銭的文化と呼ぶ。文化とは、製作者やパトロンの金銭的能力を見せびらかすための、広告なのである。しかし、この立場はアドルノの厳しい指弾を浴びる。文化が虚偽のものであれば、われわれの経験までもが虚偽のものとなってしまう、それは全体主義のような非人間的な体制を裏側からは是認する論理として働いてしまう。このアドルノのヴェブレン批判は当を得たものである。ヴェブレンは、未開人の世界と、機械と人々が一体化した未来の世界とを理想化し、その中間の文化段階を金銭的な見栄の虚飾に満ちたものと考えていた。人間の思考習慣のなかに残存する野蛮文化の残滓を指摘するヴェブレンの筆は鋭い。しかし、そのヴェブレンの論理は、20世紀の新たな野蛮を容認しかねない性質のものであった。

## 1. 消費社会の爛熟とヴェブレンの「復活」

### (1) 「社会学者」ヴェブレン

経済学史上においてヴェブレンは、制度派経済学の祖として位置付けられている。この学派は、ヴェブレンの時代とは大きく装いを変えて、現在では「新制度学派」として経済学の世界のなかに位置を占めている。しかし、そうした学派の消長とはおよそ関係なく、ヴェブレンの著作はJ.K.ガルブレイズ、C.W.ミルズ、D.リースマンらの鋭利な現代アメリカ社会分析に対して大きな影響を与えてきた。『有閑階級の理論』は、経済学、社会学、政治学等の学問的分野の垣根を超えた、社会科学全体にとっての古典となっている。

ヴェブレンの意味での「制度」とは、企業・銀行・経済官庁等の実体的な存在を意味するものではない。彼は、経済活動を行う人間の「思考習慣」こそが、経済学の対象であると考えていた。人間は環境に働きかけて、自らが必要とする様々な物を産出していく。この過程が、すべての経済活動の基底にはある。それゆえ、環境に働きかけて行く際の人間の思考を規定している枠組（制度＝思考習慣）こそが、経済学の対象とすべきものである（Veblen 1898）(1)。

人間の経済活動が、どのような意味に従ってなされたのかを明らかにする。ヴェブレンの経済学の課題を、このようにパラフレーズする事が可能だろう。もちろん、その場合の意味とは、単に思念されたものばかりではなく、習慣の力によってほとんど身体反応と化してしまい、行為者によっては自覚さえされていないようなものも含まれている。しかしながら、ヴェブレンが経済学の課題としたものは、社会学のなかの「意味学派」が担うそれに近い。「意味学派」の重要な潮流の一つに、シンボリック・インタラクショニズムがある。周知のようにH.ブルーマーは、パークやミード等、20世紀初頭のシカゴ大学で活躍した理論家たちを、シンボリックインタラクショニズムの源流として位置づけている。ヴェブレンの研究生活の出発点はシカゴ大学であり、『有閑階級の理論』の雛型となった論文は、『アメリカ社会学雑

誌』に掲載されたものである。このことが示す様に、ヴェブレンの「経済学」は、当時シカゴ大学を中心として急速に発展しつつあった、社会学や文化人類学の成果を大幅に取り入れながら形成されたものである。

そして、『有閑階級』を読むものは誰しもが、経済学というよりはむしろ、「日常性の社会学」の古典に接しているような錯覚を抱くことだろう。本書において、ヴェブレンのまなざしは常に、人々の何気ないことばの用い方や、男女の衣服、競走馬や大きな犬などに対する人々の偏愛等々、文字どおり、日常茶飯の些事に注がれている。トリヴィアルともみえる分析を通して、当時のアメリカ社会において支配的な思考習慣がなんであったのかを巧みに浮かび上がらせていく。そこにヴェブレンの本領はある。日常性に注目する姿勢も、ヴェブレンとシンボリックインタラクショニストたちとの共通点と言えるだろう。そしてトリヴィアルなものへのほとんど偏執的な拘泥と、市民社会の「俗物」たちへの悪意に満ちた晦渋な筆致とは、E.ゴッフマンを想起させるものでさえある。

### (2) ヴェブレンは、われらが同時代人

小原敬士訳の『有閑階級』岩波文庫版が公刊されたのは、1961年のことである。その時に、本書が日本社会の現実に対してアクチュアルな意味をもつという印象を抱いた者が、果たしてどれほどいただろうか。略奪的な手段によって巨富を築いた有閑階級が、湯水のような金品の浪費と、時間の「非生産的消費」の刻印を示す閑暇の営みとによって、自らの金銭的能力の卓越性を示していく。『有閑階級』が描き出す世界である。高度経済成長のようやく入り口にさしかかったばかりの当時、ほとんどの日本の大人は、田畑や工場や商店で、日々真っ黒になって働いていた。そうした状況のなかで、有閑階級が豪華な浪費の日々を送るヴェブレン的世界など、遠い異国のおとぎばなしでしかなかったのではないか。

当時においてなお、ヴェブレンが読まれた背景には何があるのだろうか。時代は米ソ冷戦の真っ

只中。マルクス主義が、資本主義にとって替わりうる唯一の指導原理だと考えられていた時代である。「アメリカのマルクス」と呼ばれたヴェブレンが行う、世紀転換期（19世紀から20世紀へ）のアメリカ資本主義への分析に、日本の読書人は関心を注いだ事だろう。また、アメリカ資本主義の「離陸」（ロストウ）を準備した、19世紀後半の文化の実態を描いた、一つの歴史的資料として本書が読まれた可能性は高い。しかしいづれにせよ、当時の日本の読書人たちにとって『有閑階級』は、「過去の名作」と言う意味での古典であった。同時代的なテーマを論じた書物というよりは、むしろ「化石」だったはずである。

しかし、1980年代の日本において、ヴェブレンの著作は、にわかにアクチュアルなものとなった。70年代、2度にわたるオイルショックを「減量経営」によって克服した日本の製造業は、驚異的な国際競争力を身につけ大量のドルをわがものとした。しかし高度成長が終焉し、産業の成熟し切った日本国内には、もはや有効な投資対象は存在しなかった。莫大な遊休資金は、海外への直接投資と、国内においては投機へと向かう。株と不動産とに巨額の資金が投下されていった。この結果日本は、資産インフレの時代に突入して行く。資産価値の急騰は多数のにわか成金を生んだ。日本版「金びか時代」の到来である。80年代は「バブル」（泡沫）の時代と呼ばれている。成金的な行動様式は、当時の日本人全体のものとなった。自分が趣味のよい人間であることを誇示するための「誇示的消費」（ブランドブームを想起されたい）が、当時の日本人の支配的な行動様式とさえなったのである。消費は生存の必要を満たすためではなく、見栄のためになされるというヴェブレンの命題は、日本人にとって自明のものとなった。こうした状況を背景としながら80年代には、ボードリヤールによって代表される消費社会論が「知」の領域において大流行をみた。そして、消費社会の「発見者」として、ヴェブレンの名が語られるようになったのである(2)。

### (3) 世紀転換期にヴェブレンを読む—本稿の課題

消費社会が華やかに言説化されたのは、80年代に入ってからである。しかし、豊かな消費者の購買力によって資本主義が支えられていくという状況は、すでに1920年代のアメリカにおいて出現していた。20世紀的・アメリカ的資本主義は、マルクスが分析の対象とした、労働者の賃金のピンハネを事とする、19世紀的・イギリス的資本主義とは異質なものだ(3)。搾取によって労働者を貧困へと追いやるのではなく、労働者を豊かにして、彼らの購買力を前提に大衆消費財の大量生産を行う。フォーディズムによって代表されるアメリカ型資本主義は、第二次大戦の戦勝によるアメリカの覇権の確立とともに、広く世界を覆っていった。大衆消費財の大量生産と大量消費とが、第二次大戦後の世界的な経済発展（ホブズボームの言う「黄金時代」）を可能にした。それでは、20世紀の豊かな国々のなかで、人々は何故、競う様に大衆消費財を購っていったのか。生活をより便利で充実したものになりたいという要求が、その根底に横たわっている事はもちろんである。しかし高価な大衆消費財は、豊かな生活の象徴であり、ステータスシンボルでもあった。他者に抜き出たい、人々の羨望の的になりたいという見栄の要素が、大衆消費財の普及に果たした役割は大きい。戦後の世界的な経済発展は、人々の見栄の所産であったとも言えるだろう。

アメリカ型資本主義は、心理的な要因に大きく依存している。人々の欲望をかきたてるために、日々夥しいCMが流されている事。この体制の下で、心理学が目覚しく発展していった事。等々がその証左である。しかし、見栄の心理に促されて人々が不必要な品物を買い、それらが大量に廃棄されていくこの資本主義は、本来的に資源浪費的な性格をもつ。資源浪費的なアメリカ型資本主義は、地球環境への大きな脅威となっている。ローマクラブの「成長の限界」（1972）以来、環境問題は全地球的な関心事となってきた。地球環境危機への最初の警鐘は、80年代の浮かれ騒ぎに遥かに先立って、打ち鳴らされていたのである。

今日、地球温暖化やオゾン層の破壊等、環境危機は、いよいよその急迫の度を増してきている。しかし、先進諸国の浪費的な過剰消費は、根本的に改善される様子をみせない。

見栄と浪費に基づく経済構造は、早急に清算されるべき、20世紀がもたらした負の遺産であろう。ヴェブレンは「20世紀の預言者」と呼びうる思想家である。本書においても、アメリカ型資本主義が本格的に立ち上がる時代に先立って、見栄と浪費の起源とその社会的帰結についての考察をまとめ上げている。『有閑階級』は、見栄と浪費の構造の清算を迫られているわれわれに、多くの事を教えてくれるのではないだろうか。

## 2. 家族・私有財産・および見栄の起源

### (1) 『有閑階級の理論』とその時代

アメリカの地理上のフロンティアは、1890年までに消滅している。しかし地理的なフロンティアの消滅後も、アメリカ社会の広大な国土と、その地下に眠る豊富な資源とは、大きな経済的フロンティアとして、野心に燃えるアメリカの企業家の前に横たわっていた(4)。広大な国土を結びつけるために、鉄道が発展が要請された。そして新たな動力源としての「燃える水」—石油—の採掘も精力的に行われたのである。さらに19世紀後半からアメリカは機械の時代に入突していく。豊富な資源と、整備された輸送手段とが、アメリカ社会の機械化=工業化を後押ししていった。鉄道王。石油王。そして「機械の時代」がもたらすビジネスチャンスを巧みにとらえた「起業家」たち。19世紀の末までに、ロックフェラー、ヴァンダービルド、モルガン、カーネギー、デュポン等々、いまをもってアメリカ社会に君臨している一群の大富豪たちが叢生していった。大富豪たちは創業の時代、農民や先住民たちから詐術と、時には暴力にまで訴えて、彼らの土地や権利を奪い取った。そのあざといやり口によって、新興成金たちには、泥棒貴族 (robber baron) の異名が与えられた。しかし世紀の変わり目ごろまでには、金にあかして奢侈にふける境地を、彼らの多くは卒業してい

た。そして、何がしかの文化的な成熟と落ち着きとを示し始める。大学や財団、そして美術館の創設、度重なる寄付行為などはその表れである。「独立独行」の個人という理念の体现者であった彼らも、一代で築いたその財産をわが子に相続・継承する事によって、ヨーロッパの世襲貴族と酷似した存在となっていった。ヴェブレンは、産業と金融の「総帥」(captain)でありながら、「有閑階級」の如くに振舞うこれらの人々の観察を通して、自らの出世作を書き上げていったのである。

『有閑階級』は、こんな書き出しで始まっている。「有閑階級の制度は、例えばヨーロッパや日本の封建時代のような、より高度な段階の野蛮文化において最高の発展をとげている」(TL p 1)。日本やヨーロッパの本物の有閑階級が、長い時間のなかで形成された「伝統」の上に立脚しているの対して、新興国家アメリカのそれは、どうあがいてもまがいものでしかない。その保有する富の莫大さにも関わらずアメリカ有閑階級の正統性は、ヨーロッパや日本の同類に比して脆弱で、かつ疑わしいものでしかなかった。そのよって立つ基盤の危うさの故にアメリカ有閑階級は、そのもてる富の卓越性を誇示するための様々なパフォーマンスを行う事を余儀なくされたのである。有閑人士のかかる「あがき」を意地悪な筆致で描き出す事によって、ヴェブレンの名を永く後世に留める名著は生まれた。

### (2) 平和愛好的な未開人

19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカ社会学において、人間性論は大いに流行していた。C.H.クーリーの最初の代表作が『人間性と社会秩序』であった事は象徴的である(5)。急速に発達しつつあった生物学や文化人類学がもたらす新たな知見が、人間性についての再定義を社会学者たちに迫っていた。『有閑階級』を執筆当時、シカゴ大学に身を置き文化人類学の知見に基づく経済学の再構築を志向していたヴェブレンも、こうした流行と無縁ではなかった (Veblen 1898)。

ヴェブレンも本能、もしくは人間の性向 (pro-

pensity) という表現を多用している。そしてヴェブレンによれば、無駄を嫌い、常に工夫や改良を加える事によって、集団全体の「生活の充実」(fullness of life) に寄与せんとする「製作者本能」と、他者と自己とを比較し、たとえ詐術や暴力に訴えようと人にぬきんでようとする見栄(emulation) もしくは差別的比較(invidious distinction) の性向を、人間の二大本能、もしくは性向として位置づけている。前者は後者に対して歴史的に先行するものである。素朴な未開人(savage) たちは、平和愛好的な人たちであった。彼らはごく貧しく、小集団で定住的な生活を営んでいた。彼らの生活においては私有財産はいまだ支配的ではなかった(p7)。「個人の有能さは、主として、そして最も持続的な形で、集団の生活をよりよきものとするような仕事のなかで示されたのである」(p16)。未開人たちは、貧しいが故に己の利益を慮る暇も無く、自分たちの集団が生き延びるために、仲良く平和的に営々と働き続けた。ヴェブレンの描く「未開人」の生活は、マルクスが「原始共産制」と呼んだものに近い。現在においても「蝦夷のアイヌ」等々、こうした「未開人」の特徴を多く留めている種族も、地球上には現在している。彼らは等しく「…暴力や詐術に直面した時に、愛すべき無力さを示す」(p7)。

こうした記述をみれば、ヴェブレンが「善良な未開人というルソー的神話」(アドルノ) に汚染されていたという指摘も、説得力をもつ。はたして、平和愛好的な未開段階が実在したのかどうか。それははなはだ疑わしい。この仮説は、最新の考古学的な、もしくは形質人類学的な研究によって、支持されるものではないであろう。ヴェブレンが残存する未開人の例としてあげている「蝦夷のアイヌ」のなかにも、例えばシャクシャインのような英雄的な戦士がいた。そもそも、動物のなかではひ弱な存在でしかない人類が、より獰猛な他の種を圧してターミナル・アニマルとしての地位を築いたのは、ヴェブレンの言う「未開」の時代に、はるかに先立つ時点においてではなかったのか。ローレンツらの、動物行動学の知見が示すように、好戦性や攻撃性は人間という種

につきまとうものであろう。いかに「未開」の種族であっても、「…暴力や詐術に…無力」であるばかりだとは考えにくい。

ともあれ、ヴェブレンの図式のなかで未開段階は、人々の生活は貧しいが、平等で幸福な時代であった。しかし、このユートピアはすぐに失われてしまう。人間は、ものを作り出すその天与の能力によって、力強い道具をわがものとしていった。それが人間たちに忌まわしい略奪の習慣をもたらすのである。こうして人類は、平和な「未開」の段階を通り抜けて、長きにわたる「野蛮文化」(barbarian culture) の時代を迎える(6)。

### (3) 「生産」の仕事と「手柄」の仕事—職業の分化とアニミズムの問題

強力な武器を手にする事によって人類は、大型鳥獣の狩猟や、他の部族との戦争を始めるようになった。狩猟や戦争などの好戦的活動は、日々の勤勉な労働とは比較にならない程の大きな富を、共同体にもたらしたのである。その結果、共同体内部の富の蓄積も進み、一部の人間を日々の勤労から免除しうるだけの余裕が生じてくる。こうして、職業と階級の最初の分化が共同体のなかに生じていった。最も原初的な職業区分は生産的(productive もしくは industrial) な職業と、非生産的な職業との間のそれである。巨大な富を共同体にもたらす事のできる後者は、前者に比して価値あるものとされ、上位の位階におかれた。軍事、宗教、学問、政治等の領域に関わるものが、非生産的、もしくは「手柄」(exploit) の仕事に分類される。時の経過とともにこれらの職業が世襲され、身分として固定される事によって、勤労者の階級とは区別されたものとしての、有閑階級の制度が確立していく。

「手柄」の仕事と「生産」の仕事との区別は、「生氣あるもの」(animate) と「生氣なきもの」(inanimate) の区別に対応している。「生氣」と生命とは同じものではない。自らの意志のもとに「行為を始める」(initiating action) 能力をもつ、恐るべき主体が「生氣ある」ものなのである(p16)。それ故、生物であっても、小動物

の類は「生気なきもの」(いなごやねずみのように大群をなして、人間にとって恐るべき存在となる場合を除いて)とされる。逆に無生物であっても、人間に対して暴威を振るう天候などは、「生気ある」ものなのである。何らかの意図をもち、敵対的な振舞いに及ぶ可能性をもつ、おそるべき主体と対峙してそれを打ち倒し、敵対者がもっていた意図とエネルギーとを、自分たちの目的達成のために利用するような活動(p12-3)。それこそが「手柄」の仕事である。強力な道具を獲得して、恐るべき動物となった後の人間たちは、略奪的活動の経済的な意味での有効性に目覚めただけではない。恐るべき敵対者と対峙して、それを打ち倒し、敵対者がもっていた力を自分たちの集団の役立つ方向に転化していくという、ある種魔術的な過程そのものにも魅せられたのである。こうしてアニミズムは、野蛮文化における一つの支配的な思考習慣となった。

自然の営みのなかに何らかの人格的な力の作用を想定する素朴なアニミズムの感覚は、やがて洗練と抽象化とを被り、人格化された神の意図によって世界のすべてを説明しようとする神人同形説(anthropomorphism)的な宗教へと発展していく。高度に完成された体系をもつキリスト教神学も、この意味で野蛮文化の精髓を体現している。後にみるように、「製作者本能」が抑圧から解放され、十全に発揮されるようになる事と、アニミズム的思考からの解放とが、ヴェブレンにおいては歴史の進歩を計る大きな尺度となっていた。今日の高度な産業社会は、そこで働く者たちに物事の因果連関を客観的かつ数量的に理解する事を求めている。機械の論理と自らを一体化させる能力をもたなければ、産業社会における有能な労働者となる事はできない。そこではアニミズム的思考など、産業効率性にとっての阻害要因ではない(p283)。付言するならば、ヴェブレンは「神の見えざる手」の如き神意を前提とする古典派経済学も、なお神人同形的な思考の枠内にあると考えていた。ヴェブレンは、そうした神意を前提とするのではなく、事実の因果連関のみを冷厳にみつめる「進化する」への経済学の「脱構築」を提

唱したのである(veblen 1898 小谷 1988)。

#### (4) トロフィーとしての女性—私有財産の始まり

生産的な仕事と手柄の仕事の区別は、男女の性差にも対応している。狩猟や戦争など、「手柄」の部類に属する仕事は、男性のものとされる。「…より頑健で力強く、急激で激しい緊張に耐える能力をもち、簡単に自己主張や、活発な競争、そして攻撃に訴える傾向が強い」(p13) 男たちの方が、女たちよりも「生気ある」対象との格闘には向いているからである。「手柄」の要素を含まない、地味な生産的労働は女たちのものとされる。生産的労働は卑しめられていく。「このような文化段階では、暴力や詐術といった武勇に基づかないいかなる職業や獲得も、自尊心をもった男たちにとっては、道徳的に不可能なものとなる」(p14)。男たちは自らの武勇の大きさを誇る。そして仲間とそれを比較し、相互に優劣を競うのだ。

「野蛮文化」の時代に、「見栄」もしくは「差別的比較」の性向が優越していった。見栄の張り合いが盛んになれば、「生活の充実」は疎かになるだろう。そしてこの文化段階においては、ものを造ることが卑しめられるから「製作者本能」は多大の抑圧を被る。しかし、見栄の性向の優越には、「製作者本能」も力を貸している。製作者本能は、「役に立つ事や有能な事を是とし、無駄や、浪費や無能を非とする感覚」を伴う。「手柄」の仕事に分類される行動が、経済的な実利の上からも、名誉という観点からも、生産的な労働よりも高い有効性をもっていた。それ故、野蛮文化の時代には、人々(特に男性)のなかにある製作者本能の故に、生産的労働が軽蔑されるという、逆説的な事態が生じていったのである(p15)。

最初の職業の分化(差別)は、男女の性差に対応するものであった。同様に最初の私有財産も、「共同体の立派な肉体をもつ男性による女性の所有」(p22)に始まる。戦争に際して、他の共同体の女性を捕獲する。するとそれは、その男性にとっての何よりの武勲の印となった。女性の占有

は「トロフィーとしての有用性」の故に盛んに行われるようになる。そして、男性によって占有される女性は、敵対する共同体から共同体の内部へと徐々にその対象を変えていった。こうして、男性が支配者として君臨し、女性がそれに従属する家父長制が始まる。そして所有の観念自体も、女性そのものから、女性の生産したものへ、さらには事物一般へとその範囲を拡大していく（p22-4）。ヴェブレンのみるところ、私有財産制度は、生存の必要を満たし、生活を充実させる事とは無関係なところから始まった。私有財産とは、それを所有する者（男）の力の証であり、共同体の他の成員（男）にそれを誇示するためのトロフィーなのである。私有財産の起源に由来するこの性格は、その後の長い経済発展の過程においても、決して脱落する事はなかった。ヴェブレンは、高らかにこう宣言している。「私有財産制度の根底に横たわる動機は見栄である」（p25）。

#### (5) 「見栄の無間地獄」—ヴェブレンとアメリカ社会

クーリーやミードなど、同時代におけるアメリカの卓越した社会理論家たちとヴェブレンとを、その属性において比較した時、そこには際だった差異が見出される。クーリーらは、アメリカ社会の主流をなす WASP の家に生まれ、高い社会階層から人生を出発させている。他方ヴェブレンは、開拓地のノルウエー移民の家庭に生まれた。彼は、英語の使用すら覚えないマイノリティだったのである。存在は意識を拘束する。両者の出自の差異は、その問題意識や理論構成の差異となって表れている。クーリーやミードは、当時大量に流入しつつあった移民たちを、アメリカ社会にいかにか同化していくか、という問題意識をもつ人々であった。そして彼らは、基本的にアメリカ的価値を是認していたのである(7)。

他方ヴェブレンの側には、アメリカ的価値観に対する根本的な懐疑がある。ヴェブレンは、アメリカにおいて神聖視されている財産制度を否定、もしくは貶低した。私有財産は、ロックら「労働価値説」の論客が主張したような、勤勉な労働の

果実ではなく、略奪の賜物である。私有財産を成功した略奪の所産とみなすヴェブレンの立場は、「財産は盗品である」と言ったクロボトキンにさえ近い。「泥棒貴族」たちは、少数者や弱者たちを搾取し、略奪する事によって巨富を築いた。ヴェブレンは、「善良な未開人」や女性など、搾取と抑圧的となっている人たちの側から、アメリカ社会のリアリティを描き出している。私有財産制度下の女性の運命についての記述は、『有閑階級』全編を貫く執拗低音をなしている。この意味で同書は、「フェミニズム経済（社会）学最初の傑作」とさえ呼ぶうるものである。

財産の所有は、当初武勇の証であった。しかし、次第に財産の保有自体が名誉とされるようになる。そして相続された財産は、当人の獲得したそれよりも一層価値あるものとされるようになっていく（p29）。その結果、世襲的な有閑階級は揺るぎ無いものとなった。ヴェブレンは一貫して、私有財産制度が存在する理由を名誉、すなわち人間の自尊心と結びつけている。人間の自己評価は、他者によってなされる評価に大きく依存している。これはクーリーが「鏡のなかの自己」

(looking glass-self) によって提起した考え方である。ヴェブレンの発想もこれに近い。「通常の場合、自尊心の基礎となるものは、隣人たちから払われる尊敬と一致している」（p30）。他者の低い評価にも関わらず、高い自己評価を維持しつづける事ができるのは、異常な神経の持ち主だけだ。宗教的な信念に凝り固まった人は、その例外であるかに見える。しかしながら、そうした人たちにおいてさえ、「超自然的な証人が、彼らの振るまいを是認してくれる事を頼りにしている」のである (ibid)。

クーリーほど体系的ではないにせよ、『人間性と社会秩序』（1902）に数年先立って、自己像は他者のまなざしに支配されるという考え方をヴェブレンが示した事は注目に価する。アメリカ社会は当時、急速な都市化の過程にあった。人跡未踏の開拓地とは、すべてにおいてかけ離れた都市の生活のなかで、人々は不断に他者のまなざしの圧力にさらされるようになったのである。そうした

状況下において、他者の評価を顧慮する事なく日々を送る事は、不可能とさえ感じられた事であろう。個人主義が優越していたアメリカ社会においてさえ、他者の影響を受ける事無く自律的な自己決定を行う「独立独行の個人」の像は、当時すでに疑問符のついたものとなっていたのである。他者の評価に従って形作られる自我、というヴェブレンやクーリーの「発見」は、そうした時代状況を反映したものだ。D.リースマンは、ヴェブレンの最も厳しい批判者の一人である。しかし同時にリースマンは、ヴェブレン研究の単著を書くまでに彼の著作を精読した人物でもある (Riesman 1953)。リースマンは、他者の思惑に拘束されやすい現代人という命題をヴェブレンから引き取り、その上に立って、「他者指向性」の概念を創出したとは言えないだろうか。そして「超自然的証人」についてのヴェブレンの記述は、社会学における準拠集団論の先駆をなす言明でもある。

人間は他者のまなざしに縛られた存在である。この事が嫉妬と、それに基づく富の獲得への競争へと人々を駆りたてていく。社会のなかで、「恥ずかしくない」とされる富の水準に到達したとしよう。すると、今度は自分と同等と目されている人々に抜きん出ようと試み、それが達成されるや、今度はさらにその一つ上のクラスを比較の基準とするようになる…。私有財産は生存の必要や、生活内容の充実とは無関係である。それを増大させようという欲求は、自分と同列の他者に抜きん出たいという心理に基づくものだ。この競争においては、一つの目標をクリアすれば、すぐ次の目標が与えられる。だから個人は財産獲得の競争から、永遠に抜け出す事ができない。「…それは、差別的な比較に基づく名声を求めての闘争だから、決定的な目標達成による解決など、ありえない」(P32) のである。

自尊心は他者の是認を必要としている。そして私有財産制度の下では、財産の保有の多寡がその人間の値打ちを決めてしまう。だから自尊心ある人間は、命ある限り、財産獲得の競争から逃れる事はできない。ヴェブレンの描き出した「見栄の

無間地獄」とも言うべき状況は、この当時はまだ、特殊アメリカ的なものであっただろう。当時のヨーロッパや日本などでは、封建制度の残滓がいまだに社会を覆っていたから、個人が到達する社会的な地位や豊かさが、無限に上昇可能なものとは考えられてはいなかった。他方、巨富へと至る機会の平等 (アメリカン・ドリーム) を国是とするアメリカには、そうした制約は存在しない。「羨望は競争を刺激し社会を文明化する」(作田 1973)。激烈な競争のなかからアメリカは独自の「文明」(American way of life) を生み出し、それは20世紀の世界を席卷していった。アメリカ化した世界のなかで「見栄の無間地獄」は世界的な現象となった。もちろんそれは80年代以降の日本人にとっても、馴染み深いものなのである。

### 3. 見栄と浪費の社会学

#### (1) 閑暇と消費の理論

野蛮文化の下で、生産的な労働は弱さの証とされた。故に勤労は忌むべきものとされたのである。かつて高貴な人々の間では、労働がどれほど忌み嫌われたていたか。それはこんな風だった。自分の手で食べ物を口に運ぶ事を拒み、餓死してしまったポリネシアの酋長。椅子の位置を変える役割の従者がそこにいなかったために、火事が起こっても逃げようとはせず、焼け死んだフランスの王様 (p43)。これは本当に起こった事なのか。はなはだ疑わしい。真偽を確かめようもない、奇想天外な記述はヴェブレンの著作のなかにはたくさんある。

野蛮文化においては、労働が忌避される一方で、閑暇 (leisure) が価値あるものとされた。「…閑暇とは、怠惰や無為の事をいうのではない。ここでは閑暇ということばを時間の非生産的消費という意味で用いている」(ibid)。閑暇とは無為ではなく、非生産的活動を意味している。閑暇の活動は「非物質的財貨」(immaterial goods) を生み出す (p45)。「非物質的財貨」とは、学問や芸術、スポーツ、礼法等々、経済的な利益に直結しないものでなければならない。「非物質的財貨」



を身につける事が、一貫して閑暇の暮らしを送ってきた証左となるのである。この非物質的財貨の故に閑暇は、「…価値ある、あるいは美しい、否、非のうちどころがないとされる生活のための前提条件…」(p38)とされてきた。この感覚は、古代ギリシャの哲学者の昔からいまに至るまで続いている。会話や挙措のなかで「非物質的財貨」を不断に示し、閑暇の証を誇示する事 (conspicuous leisure) が、有閑紳士たることの条件なのである。

野蛮文化においては、消費もまた武勇の証として重要視される。閑暇が時間に関わるのに対して、消費はものに関わる。ものを気前よく消費することは、優れた金銭能力示すと同時に、また気前のよさや豪快さといった「男らしさ」を示すものでもある。生存の必要を満たすだけの量をはるかに超えた浪費こそが、「男らしさ」の証とされる。野蛮文化の基準に従えば、浪費 (wastefulness) は美德だ。食べ過ぎ、飲みすぎは、豪快な振るまいとして許容される。また持続的な不摂生が原因でかかる病気も、「…高貴、優雅…」(p71)とされた。他方、女性や子ども、召使等々、家長に従属する立場の人たちには、生存の必要を満たす以上の消費は原則的に禁止された。女性の飲酒が長きにわたってタブーとされたのは、このためである (p71)。時の経過とともに、有閑階級における消費の様式も洗練されていく。すると、やみくもな浪費ではなく、趣味のよいものを適切に消費する事—ものに対する目利きとなる事—が、有閑紳士の条件とされるようになった (p74)。有閑階級の一員として認められるためには、気前よく金品を消費する事によって、おのが財力を共同体の他の成員に対して誇示する (誇示的消費) 必要がある。舞踏会に代表される様々なパーティーは、「誇示的消費」の絶好の舞台となった (p75)。

誇示的な閑暇や消費が、当の家長だけではなく、その使用人や家族の手によって担われる事を、代行的閑暇 (vicariousleisure) もしくは代行的消費 (vicariousconsumption) と呼ぶ。しかし、この二つは厳密に区別できるものではな

い。閑暇の代行者には、相当な金をかける事が常だからである。有閑紳士の館の召使に例をとろう。召使たちは、十分な勤労の能力を持ちながら、一切生産的な仕事を任されず、主人の世話のためだけにはべっていなければならない。有閑階級の制度が最高度に発達した封建時代においては、個人の労働が最も大きな経済的成果を生み出していた。それ故多数の人間を保有し、しかも彼らの多くに閑暇の—もしくは消費専従的な—生活をさせる事は、金銭能力の決定的な証となっていたのである。有閑紳士たちは、二種類の従者の群れを抱えていた。「…ある一群は有閑紳士のために、ものを創り出す。他方、妻、あるいは正妻を頭とする別の一群は、誇示的閑暇の場面で、主人のためにそれを消費するのである」(P63)。

『有閑階級』の刊行時点ではもはや、召使を雇う事など流行らなくなった。機械生産の一般化で、労働は大きな苦痛を伴うものではなくなり、労働に従事する事への屈辱感は、大幅に軽減される。そして、野蛮文化の時代に抑圧されていた「製作者本能」も目覚しく解放されていく。何も生み出さない従者を抱える事は、忌むべき無駄と感じられるようになる。そして勤労者たちも、自由な賃労働を選べるのだから、個人に従属する召使などになろうと思う者もないだろう。こうして代行的閑暇は現代において急速にすたれていく。「…しかし、妻は最後の代行的閑暇の担い手としてとどまる」(p80)。どんなに困窮していても、男たちは、妻の代行的閑暇を保とうと必死になる。「しかし彼女はまちがいなく、まったく間違いなく、理論的には家長の動産奴隷なのである。なぜなら習慣的に代行的な閑暇や消費を行う事は、常に変わらぬ召使の印だからである」(p83)。20世紀は女性解放の世紀となった。しかし、女性の代行的消費者一家父長的家族のなかでの召使—という地位が本格的に解体を始めるまでには、本書の刊行から、なお70年近い歳月を要したのである。

## (2) 閑暇の衰退と消費の興隆

現代においては、「代行的」のみならず、閑暇そのものが衰退をきたしている、とヴェブレンは考える。それは当時進行しつつあった、アメリカ社会の都市化と大いに関連がある。

ある人間が身につけた「非物質的財貨」の値打ちを知るためには、深く、長い付き合いが求められよう。しかし人口移動が激しく、人々が多忙な時を送る大都市の生活においては、そんな余裕などない。「これらの行きずりの観察者たちに印象を与え、自らの自己満足を観察者たちのなかに留めておく。そのためには、彼の金銭的な力の署名を、走り去って行く人たちでさえも読み取れる形で書きこんでおかなければならない。今日の発展の潮流は明らかに、誇示的閑暇ではなく、誇示的消費の価値を高める方向に向かっている」(p 87)。匿名性と流動性として特徴とする都市の生活のなかでは、「走り去っていく人たち」にとってさえもその金銭能力を誇示する事のできる、「消費」が重要性を帯びてくる。都市生活者の消費性向の高さもこうした観点から説明される。

都市の生活は、匿名性と流動性と、それらがもたらす孤独とを特徴としている。共同体的な紐帯から解放された都市の孤独は、たしかに心地よい。しかし、いかに孤独を愛する人間であっても、他者の是認を得る事なしにはその自己像を保つ事はできない。金銭能力の有無がその人間の価値を決定して行くような社会のなかでは、人は絶えず「消費」を行う事によって、自己のアイデンティティを他者に表示し、承認を受けなければならないのである。自己の存在証明としての消費。80年代の日本でようやく話題とされるようになったこの主題を、ヴェブレンはすでに、19世紀から20世紀の世紀転換期に提示している。

しかし、閑暇から消費へという力点の移行は、単に都市化の帰結ではなく、より大きな歴史的な変動に由来するものなのである。ヴェブレンは、独自の進化論的な、あるいは進歩主義的な歴史の発展段階論を有していた。すべての人々が貧困のなかで、平等かつ友好的に暮らしていた初期の「平和段階」(peaceful stage)。直接的な暴力が

社会のなかで大きな支配力を握っていた「略奪段階」(predatory stage)。暴力と詐術がなお本質的な支配力を有してはいるものの、それらは後景に退き、厳格な身分制の下に表面的には平和が保たれている(ヨーロッパや日本の封建時代がその代表的なものとする)、半平和段階(half-peaceful stage)。高度な機械生産と、平和なくしては存続しえない自由な通商の上に経済活動が成り立っている、後期平和段階(later-peaceful stage)。

アドルノは、この発展段階論を、「史的唯物論と実証主義とのアマルガム」と評している(Adorno 1941訳104頁)。正鵠を得た評価と言えよう。ヴェブレンにおいては、製作者本能の解放が、歴史の進歩であった。製作者本能の解放は、生産力の増大を結果する。この意味で、ヴェブレンとマルクスの生産力主義とは一致している。また、歴史発展の最終段階が、原始のユートピアと相似形を描くという点においても、ヴェブレンとマルクスは酷似している。しかし、ヴェブレンはマルクスの労働価値説には与しなかった。そして労働のもつ物理的なエネルギーよりも、物質的な世界に働きかける人間の思考習慣という、あえていえば精神(理性)的側面をより重視している。歴史の発展を理性の発展と同一視する点においては、ヴェブレンの歴史認識は、コントやスペンサーのような実証主義のそれに近い。また高度な産業社会が平和の存在を前提としているという認識をも、ヴェブレンと実証主義の旗手、スペンサー(「軍事社会」→「産業社会」)とは共有している。

19世紀末のアメリカ社会においては、自由な賃労働が主体となっていた。勤労は、特定の個人に対する隷従や異常な肉体的な苦痛を伴うものでも、忌むべきものでもなくなっていた。その結果、「…製作者本能は、より以上の執拗さと一貫性をもって、自己を主張するようになった」(p95)。製作者本能の台頭のなかで、生産的な活動が称揚されるようになる。時間の「非生産的消費」たる閑暇の価値は、必然的に低下していく他ないのである。

太古の未開人は、貧しい暮らしのなかでも、集団全体の福利に寄与すべく懸命に働いていた。野蛮文化の時代の抑圧が弱まると、未開の時代に優越していた利他的な人間本性もまた復権してくる。「…いかなる経済的事実も、それが万人に役立つのだ (impersonal usefulness) という事を、自らの手で証明しなければならない」(p98)。そうした規範が支配する状況のなかで、ただ他者に抜きん出たという自尊心を満足させるためだけの活動が、人々の是認を得ることなどありえない (ibid)。「後期平和段階」の到来のなかで大幅に解放された製作者本能は、誇示的な閑暇や消費とは、根本的に相容れないものである。

後期平和段階においては、活動、生産性、そして社会集団全体の福利を増大させる活動が是とされるようになる。しかし他方では、野蛮時代の思考習慣も、完全に払拭されてはいない。否、それらは有閑階級をその本拠地としながら、社会のなかに根強く残っている。高貴なる者は、非生産的な事柄に時間を消費すべし。閑暇をよしとする、野蛮時代に由来する思考習慣も、とりわけ有閑階級のなかでは、いまだに衰えてはいない。閑暇と生産的活動。有閑階級は、相矛盾する二つの要請に対する、巧みな折衷案を発明した。「様々な組織が創設された。その公式の形態や組織名には、一見したところ進歩的な目標が掲げられている」(p96)。そうした組織のもとで、有閑階級は社会的、宗教的な様々な慈善事業を行う。チャリティや、あるいはボランティアとでも呼ぶべき有閑紳士・淑女の諸活動は、「生産的活動」や「全体の福利の向上」という見せかけの下でなされる、誇示的閑暇に他ならない。

誇示的閑暇は、その姿を変えてヴェブレンの時代をも生き延びていった。他方、代行的閑暇は消滅の運命にある。召使は雇用主に対して人格的に隷属している。自由な賃労働の時代に、召使になる物好きなどいない。後期平和段階において、代行的閑暇など不可能事である。しかし、女性は最後の代行的閑暇の担い手として残る。「そして、予想されるように、後年、経済制度が発展していくなかで、代行的閑暇の義務を常習的に遂行して

いた人々の数は、徐々に減少していった。そしてその最後のものとして、妻が残った」(p80)。人類史上最初の奴隷は女性であった。そして、地上に残された最後に残された奴隷もまた、女性なのである。

### (3) 金銭的文化の諸相

後期平和段階において、製作者本能は目覚しく解放されていった。しかし、人間の見栄の性向が姿を消す事はなかった。後期平和段階における経済活動の目覚しい発展は、社会のなかでの金銭の影響力を絶大なものとしていった。金銭こそが、すべての力の源泉である。人々の自尊心は、自分がどれだけの金を稼ぐ事ができるかによって決定されるようになった。「このような産業化したコミュニティのなかで見栄の性向は、金銭的な見栄として表現される」(p110)。後期平和段階においては、金銭が人々の思考習慣を決定づけていく。ヴェブレンは、こうした文化のあり方を「金銭的文化」(pecuniary culture)と呼ぶ。

金銭的文化のなかで、誇示的消費への圧力は強まっていく。こうした状況のなかで、人々には自らのライフスタイルを自由に選び取り、自らの欲するところに従って生活水準を設定していく自由はない。ひとかどの人間として社会的に認知されるためには、周囲から是認されるような金銭の使い方をしなければならないからだ。「…個人の生活水準を決めるのは、コミュニティによって承認された基準か、彼の属する階級である」(p111)。所得が上がれば、それに伴って誇示的消費の支出も増大していく。だから社会全体の生産力が増して名目所得が増加しても、豊かになったという実感が得られる事は稀である (ibid)。

人前では、自らの階級に相応しいとされるだけの水準に達するように、気前よく消費する事が、産業化された社会を生きる人にとっての一つの責務とさえなっている。他方、「大半の階級の家庭生活は、相対的にみみっちくなっている」(p112)。人前では豪華な消費を要求される。しかし現実の収入は乏しい。日々の暮らし向きは、切り詰めたものとならざるを得ない。だとすれば、公

的な生活の「舞台裏」たる家庭生活は、人々の目から隠されなければならないだろう。「産業が発達した国々の大半で、家庭生活を他者の目から切り離すようになったのはこのためである」(p112)。近代社会におけるプライバシーという観念の興隆をめぐる、ヴェブレン一流の説明である。

金銭を最重要視する観点は、人々の趣味や美の基準のなかにも入りこんでくる。「高価で美しいとされているものを使用し、観賞する事から受ける満足の大半は、美という名前に蔽われているはいるものの、それが高価であるという事についての満足なのである。すぐれた品物に対するわれわれのより高い評価は、それがもつ優れた名誉ある性質についての評価である。…」(p128)。高価なものは名誉あるものだ。名誉あるものは美しい。故に高価なものは美しい。金銭的文化のなかでは、高価さと美しさとは、等号で結ばれる。逆に、高価でなければ美しくないのだ。そのためにこんな転倒が生じる。「このようにして、例えばある種の美しい花々が、慣例的に、目障りな雑草とみなされるようになった」(p132)。

「金銭的文化」のなかで、「成金趣味」の横行を避ける事はできない。とりわけ社会が若く活力をもち、文字どおりの新興成金が多数叢生するような時代において、この命題はあてはまる。「金ぴか時代」と呼ばれた19世紀末葉のアメリカは、まさにそうした時代であった。ヴェブレンもこれを認めている。「この国においては、他のほとんどの国と同じように、19世紀の半ばまでは、節約する必要がないほどの富をもっている人は、人口のなかのわずかな部分を占めているに過ぎなかった」(p136)。世紀の変わり目に世を去ろうとしていた世代は、周囲がひどく貧しかったため、趣味の洗練がなされずに終わったのである。周囲が貧しければ、金銭的な力の誇示は、有力な差別化の手段となる。また、貧しさに追われ、豊かな鑑識眼をもたない人々に対しては、「金ぴか」の衣装や建物を作る他に、自らの財力の強さを理解させる道などないであろう。

しかし成金たちの第二世代は違う。この世代のなかでは、「金ぴか」の表現は影を潜め、例えば

公園などでも、手をかけない「自然な」趣を尊ぶ風潮が支配的になってくる。「…農村的で“自然”な公園や庭園に対する好みは、より高い社会的・知的水準の証となっている。」(p137) 趣味の洗練、あるいは自然志向が、この世代の「誇示的消費」の大きな特徴となっている。この変化が生じた理由を、ヴェブレンは2つ挙げている。

一つは、有閑階級に対する「社会的確証」(social confirmation)の発生である。社会が豊かになり、一定以上の豊かさの水準に到達した人々が、アメリカ社会にも多数出現してきた。「このような選ばれた階級のなかでは、節約からの解放は極めて自明の事で、もはや金銭的体面の基礎としての用をなさなくなってしまうほどである」(ibid)。この世代において、金銭的に豊かな事は自明である。だから、「金ぴか」の表現はもはや不必要である。そして、成熟した有閑階級の分厚い層は、一つの閉じた社会圏を作り出す。彼らのなかには、「…人口のなかの劣悪な部分を、その賞賛や侮蔑を求める観客としてさえも、彼らの枠組から締め出していく傾向が生じてくる」(p187)。ものを見る目をもたない貧民などではなく、豊かな鑑識眼をもつ、いまや分厚い層を誇るようになった全国の同類が、有閑階級の第二世代にとっては、「誇示的消費」のオーディエンスとなったのである。「富と文化の点で進歩した社会のなかで支払能力は、見るものの側の、手の込んだ鑑識眼が必要とされるような方法によって証明されていく」(ibid)。高い鑑識眼をもつ、優れたオーディエンスの是認、もしくは「社会的確証」を得る事が、この世代の自尊心の基礎をなしている。趣味の洗練がもたらされる所以である。

#### (4) 無駄を嫌う心が生み出す巨大な無駄一流行現象のパラドクス

趣味の洗練と自然志向とは、機械生産の隆盛がもたらした「製作者本能」の解放とも、深く結びついている。無駄を嫌う製作者本能は、「金ぴか」趣味とは相容れまい。「自然へのこうした好みは、多くのばあい、製作者本能の出現によるものである」(p137)。名誉の観念とともに製作者

本能は、われわれの美の基準を形作っている。名誉とされるもの—すなわち高価なもの—は美しい。しかし、われわれは、簡素で有用なものに対してもまた美を感じる。そして、製作者本能は、名誉の観念が基礎をおく野蛮文化に、はるかに先行して出現したもののなのである。この二つの審美的基準は、両立するものではない。名誉の基準を満足させるものは必ずや浪費的で、勤労や生産の足かせとなるものばかりだからである。製作者本能と名誉の観念は、はげしくわれわれのなかでせめぎあっている。ヴェブレンのみるところ、そのせめぎあいこそが産業社会の文化を特徴づけるものである。

製作者本能に基づく美の規範の下では、「使用する対象のなかでは、単純で飾り気のないものが最善である」(p152)。しかし他方、「名声の刻印を伴わない美なるものは受け容れられない」(p151)という規範も現存している。その両者を和解させるために登場するのが、新奇性(novelty)である。この社会のなかで作られているものの多くは、「…巧みな技をほどこして、みるものを当惑させるように計算されている。突拍子もない示唆や、ありもしないヒントで人を惑わせる様に仕組まれているのである」(p152)。新奇な技巧で、簡素さと有用性のなかに美を見出す観点に対して、いわば目くらましをしかける事によって、名声と浪費の基準は自らを貫徹していく。簡素さと有用性を重んじる立場は、製作者本能に根ざすものだから、創意工夫の類には点が甘い。常に新奇なものがあらわれては消えて行く流行現象も、ここに起因している。

ヴェブレンは衣服に例をとりながら、独自の流行論を展開している。「名声の基準は、衣装は高価でなければならないと要求している。しかし、あらゆる浪費的なものは、自然の趣味にそむくものだ。すべての人間は、わけても女性はより高い程度において、無駄を嫌う。それはかつて、自然は真空を嫌う、と呼ばれたのにも等しい。心理学的法則はすでにその事を指摘してきている」

(p176)。衣服のなかに人々は常に無駄な点を見出し、それに改良を加える。しかし、その改良は

決して見せかけ以上のものにはならない。人々の目が、新しい流行の新奇さに馴れ、だんだん飽きてくると、その衣服がもつ無駄の要素は、再び耐え難いものとなる。すると、その衣服には更なる「改良」が加えられる。「こうして流行の衣服は、醜悪でかつめまぐるしく移り変わるものとなる」(p177)。時の試練に耐える流行などはない。すべての流行は、簡素さと有用性という美の基準が再び目を覚まし、それを排斥するまでの束の間の命しかもたないのである(p178)。

流行論においてヴェブレンは、無駄を嫌う心が無駄を生んでいくというパラドクスを描き出した。金銭的文化のなかでは、製作者本能までもが、皮肉な事に無駄と浪費の増大に手を貸している。またたく間に様々なハードやソフトを「陳腐化」させていくIT技術に振りまわされているわれわれは、このヴェブレンの分析に、苦笑せざるを得ないだろう。無駄や浪費を忌み嫌う製作者本能の全面的な解放が、浪費を廃絶するどころか、むしろそれを極限にまで推し進めてしまう。ヴェブレンが流行論において描き出したこの命題は、大きな今日の意義をもつものである。無駄を嫌い、より高い効率性を求めるが故に、いま現在、まだ十分使えるものをゴミにしてしまうという大きな無駄を犯す。かかる倒錯した人々の心理を基盤として、「大量生産・大量消費」の資源浪費的な経済構造は成立している。もちろん、自由経済体制の過剰に競争的な性格も、こうした倒錯には大きな役割を果たしている。ライバルに出しぬかれるのではないか、という強迫観念さえなければ、わが同業者の大方は、いまだに旧式のワープロで文章を書いていたに相違ないのだ。

ヴェブレンはまた、流行の過程で生み出されるものはすべて醜いと考えていた。流行の消長の速度が速ければ速いほど、「…次々とあらわれる流行の様々なスタイルも、よりグロテスクで、より見るに耐えないものとなる」(p178)。新奇性への関心が、流行を生む。いま流行っているものより、より新奇な—グロテスクな—ものを提示しなければ、新たな流行を生む事はできない。それ故、流行の消長の速度が加速化されればされるほ

ど、審美的劣悪化の程度もまた、ひどくなっていく。そして流行の消長の速度は、誇示的消費への圧力と正比例している。誇示的な消費への関心が強ければ、「新奇」なものを採用して、他者の関心を集めたいという欲求もまた強まるからである。したがって、誇示的な消費の圧力が最も強い大都市の暮らしのなかにおいてこそ、流行は最も醜悪な姿を取る(9)。「趣味の洗練」が進む時代のなかで、悪趣味が極限にまで進行していくというパラドクスをも、ヴェブレンは示している。人間の手が加われば加わるほど物事は醜くなる。そんなベシミズムがヴェブレンにはある。「…芸術家の手が触れていない、側面や後部の何もない壁が、多くのばあい建物のなかで最も美しい部分なのである」(p154)。

製作者本能の再興は、人々の美的判断に大きな影響を与えていった。それは女性美についての流行の上にも及ぶ。ヴェブレンが、当時の婦人参政権運動等をはじめとする、女性解放運動の潮流に多大の共感を抱いていた事は疑いない(10)。ヴェブレンは、女性はいまだに代行的閑暇の担い手に止まっており、家父長制的な家族のなかで、召使のような従属的地位に置かれていると考えていた。彼は女性の衣服の分析を詳細に行っている。彼女たちの衣服は、誇示的閑暇の代行者たるその地位の表示となっている。「彼女たちの服装は、この目的を可視化するように仕立てられている」(p179)。女性の衣服は男性のそれとは異なり、ごてごてと飾り立てられている。過剰な装飾は召使や僧侶の衣服にもみられるものであり、女性が閑暇の代行者である事の印である (p183)。ハイヒール、コルセット、スカート。女性の衣服においては、彼女の労働不能性が強調されている (p179)。労働不能性の強調は、労働できない女性を養いうる事が、男たちの名声の基盤となってきた歴史と結びついている。女性の労働不能性というテーマは、長い歴史のなかで、男たちによって偏愛されてきた。その結果、纏足やコルセットのような身体を奇形化させる装置までもが、いくつも生み出されてきたのである (p181)。

しかし経済が発展し、豊かな階層の女性たち

が、生産的な職業から免除されている事が自明になってくると、女性の労働不能性を強調する習慣は徐々に廃れてくる。ロマン主義的な「弱々しいまでに繊細で、清純で、危険なまでにか細い」(p148) 女性美の理想は流行らぬものとなる。そして、「手足を否定せず、あるいは実際、彼女自身の肉体的事実の全体を否定しないような」

(ibid) 古代的な女性像が復権してくるのである。こうした女性像の転換のなかで、コルセットの使用も、徐々に廃れていった (p184)。ヴェブレンは、すべての流行は醜悪なものとなっていくと喝破した。しかし、ロマン主義的な基準から古代的なものへという女性美の変化については、肯定的な判断を示している。女性たちは、なお代行的閑暇の担い手に止まっている。しかし、古代的な女性美の基準の復権は、彼女たちが身体を回復した事を意味しており、男性に対する従属的な地位からの解放の一步を踏み出した事を意味している。そしてヴェブレンは、本書の末尾近くで、有閑階級の女性たちのなかに、非差別的な古代的心性への「先祖帰り」の徴候をも認めている(『有閑階級』第13章「非差別的関心の残存」)。この問題については、また稿を改めて詳述したい。

#### 4. ヴェブレンが問いかけるもの

##### (1) 「上から下」か、「下から上か」—文化的影響力の流れの問題

19世紀から20世紀にかけての世紀転換期のアメリカにおいては、機械生産が本格化し、社会の技術的水準は「後期平和段階」と呼ぶにたるころまで上昇していた。こうした状況の下では、野蛮文化の残滓に過ぎない見栄の性向は、大幅に後退していったべきであろう。しかし、見栄の性向は、なお人々の閑暇と消費のあり方を根強く規定している。なぜ見栄の性向は衰亡しないのか。その答えをヴェブレンは、有閑階級の文化的支配力のなかに求めている。有閑階級は、様々な意味で保守的な存在である。彼らは、その優れた財力によって、進化(歩)を促す社会の淘汰圧力を免れうる存在である。進化論の原理は、「存在

するものはすべて誤っている」(p207)と告げている。他方、「存在するものはすべて正しい」(ibid)。これが有閑階級の依拠する論理である。そして有閑階級とは、現体制のなかに既得権をもつ人々たちであるから、彼らの政治的傾向は、必然的に革新ではなく保守の方向へと向かう(p198-9)。有閑階級は、誇示的閑暇や消費のモデルを社会に対して提供する存在である。それ故、彼らの保守的な思考習慣は、より下位の人々のそれに対しても大きな影響力を与えていく。さらに有閑階級は、社会の富の大きな部分を占有しているから、とりわけ下層の人々には、生存をぎりぎり可能にする程度の生活資材しか行き渡らない。革新を行うには何らかのエネルギーが求められるが、下層の人々にはそのエネルギーなど残されてはいないのだ。有閑階級は経済的な過程を通して、間接的に社会のなかに保守的な空気を醸成して行く。

ヴェブレンは有閑階級の文化的支配力を強調した。それは、「文化は上から下へと流れる」とパラフレーズする事も可能だろう。この命題は、今日の文化研究においても論争的な主題たりうる。社会学史の流れをみても、ヴェブレンのこの命題は、大衆社会論の文脈のなかで、まったくベクトルの異なる二つの創造的な仕事を生み出したのである。一つはC.W.ミルズの仕事である。彼は、有閑階級の文化的支配力という命題を、政治的・経済的方向へとシフトさせながら、アメリカを支配するパワーエリート群の構造を明らかにしていった。ミルズの「パワーエリート」は、『有閑階級の理論』の大衆社会版であり、その権力構造編でもある(Mills 1956)。いま一つは、D.リースマンの仕事である。「他者指向」のパーソナリティが支配的な性格類型となる社会においては、政治家もまた、メディアによってそのイメージが創り出される、大衆にとっての一つの心理的消費財と化していく。そして大衆社会の政治的意志決定は、強力な政治家のリーダーシップの所産というよりはむしろ「拒否権行使集団(veto group)」の力関係のなかから生じてくる(Riesman 1950)。リースマンはミルズとも、そしてもちろ

んヴェブレンとも異なり、大衆社会における「下から上」という影響力の流れを強調したのである。

ホブズボームは、「上から下」という文化的影響力の流れは過去のものとなったと断言する。ハリウッド映画も戦間期までは、アメリカの中産階級的家庭の理想を謳いあげていた。それはアメリカ国内のより下層の人々の、そして広く世界の民衆のアメリカ的生活への羨望のもととなっていたのである。しかし、若者文化の興隆に伴って、中産階級の基準から見て、決して上品とは言えないような行動様式が美化されて描かれるようになる。イギリスのパブリックスクールの少年たちが、労働者階級の発音を真似するといった現象が示す様に、「ブルージーンズ」の時代の到来とともに、「下から上」という文化的影響力の流れは決定的なものとなった(Hobsbawm 1994 訳(下)66-9ページ)。

戦後のベビーブームに伴う「若さ」の価値の称揚を、ホブズボームは、「下から上」への転換の根拠としてあげている。たしかに、ヴェブレンの時代ならばいざ知らず、大衆社会状況の下で、ただ「上から下」へと文化が流れていくという事態は、いささか考えにくい。大衆社会状況とは、社会の平準化が進む状況でもある。人々が均質的な存在だという思いこみが強まれば、社会のなかでの有閑(特権)階級が存在はみえにくいものとなる。そのみえにくい存在の側に人々がひたすら顔を向け、その行動様式を模倣すると考える事は、不自然である(11)。また大衆社会状況においては、メディアが文化の有力な担い手となる。文化産業という営利事業において、「売り物」となるのは新奇性(物珍しさ)であろう。英国王室、芸能人の日常、不良少年の行動、海外のエキゾチックな文化をもつ民族…。物珍しく人の目を引き、その結果利益をもたらす対象であれば、それが何であろうと文化産業は飛びつくのだ。だとすれば、大衆社会状況における文化的影響力の流れは、「上から」あるいは「下から」いずれか一方という単一的なものではないだろう。むしろ、ランダムなものとなる可能性が大きい。たしかに大衆社会状

況における「下から上」への文化的影響力の優越という、ホブズボームの指摘は、当を得たものではある。しかし、「上から下」の流れも、絶える事はなかった。皇室の家庭生活への憧れ（「ミッチー」ブーム）と、「ブルージーンズ」的若者文化への共感とは、60年代の日本社会のなかでは、たしかに共存していたのである。

マスメディアが主な担い手となった大衆文化の時代においてさえ、文化的影響の流れは一様のもではなかった。これが、今日のサイバーメディア、パーソナル（もしくはインターパーソナル）メディアの時代ともなれば、文化的情報の発信源は無限に多様化していき、影響力の流れはより一層錯綜したものとなるに違いない。そして、ポストモダンの観点到慣れ親しんだわれわれにとって、ある文化的メッセージを作成し、伝達する事で人々の思考習慣に強力な支配力を及ぼす「主体」（の陰謀？）なる観念は、受け容れがたいものである。

では、有閑階級の文化的支配力、もしくは社会の階層的序列構造のなかを、「上から下」へと流れていく文化的影響力というヴェブレンの考え方は、今日ではもはや「化石」となってしまったのであろうか。現代の世界においては、アメリカ合衆国を頂点として、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの最貧国を底辺とする、国家間の「階級関係」と呼ぶより他に形容のしようもない、ピラミッド状の構造が存在している。そして、アメリカの経済的な世界制覇が、世界の民衆の文化や生活様式の「アメリカ化」を伴ったように、豊かな国の貧しい国への経済的進出は、常に文化の浸透を随伴するものであった。そこで浸透して行く文化のなかには、例えば、マクドナルドにミッキーマウス、そして日本の東南アジア進出においては「ドラえもん」のようなもののまでもが、含みこまれていたのである。豊かな国の有閑（特権）階級文化が、貧しい国の民衆のそれを席卷していくという訳では必ずしもなかった。しかしミッキーマウスであれ、「ドラえもん」であれ、大衆文化のヒーロー（？）たちが、貧しい国の人々のなかに、豊かな国のライフスタイルへの憧れをかきた

て、結果としてその国を、アメリカや日本の市場に仕立て上げていく事に貢献した事実を否定する事はできないのである。今日の世界のなかには、もてる国ともたざる国の間に、大きな富の格差が存在している。そして、アメリカの覇権と英語支配の関係が示すように、文化と政治経済が分かち難く結びついている状況が現存もなお、厳然と存在している。こうした、状況に対する批判を展開していくためには、ヴェブレンの提示した「上から下」への文化的影響力の流れという観点を、われわれは手放してはならないだろう。

## （2）暴露戦術の切れ味―「ディオゲネス的消費者」の悲哀

「大衆消費社会の、ほんの出発点にいたヴェブレンには、やがて明らかにされてくる『記号の消費』論的視野は、開かれていなかった。『誇示的消費』は彼にはただ、近代産業システムの合理的発展を阻害する『封建時代のヨーロッパや、日本のような高度後期野蛮社会』の残滓と映ったのである」（池井1998 330頁）。たしかに池井の言うように、オリジナルの代用としての記号の使用（シミュレーション）から、オリジナルなき複製としての記号の自己展開（シミュラクル）という、ボードリヤールの観点を、ヴェブレンの著作のなかには見出す事はできない。その意味で、池井の指摘は当たっている。しかしこの批判は、「ヴェブレンの時代には、テレビもパソコンもなかった」と言っているに等しい。3節までで示した様に、見栄と浪費の構造についてのヴェブレンの分析は、実に今日の消費社会の状況を予見したものが多し。そもそも消費記号論じたいが、ヴェブレンと、その影響を深く受けたリースマンの仕事抜きには出現しえなかったものではないのか。ボードリヤールに始まる消費記号論が、ヴェブレンとリースマンの仕事に、そのきらびやかな概念装置以外の何物を付け加える事ができたのか。知りたいものである。

「金銭的文化」の実態を暴露するヴェブレンの筆には、仮借ないものがある。当時盛んになっていた手作りの品物への愛好に対して、ヴェブレン



はこんな皮肉な分析を展開している。機械生産は、均質的で高品位の品物を廉価で創り出す事を可能にした。粒の揃った機械製品は、安価さを連想させるから「誇示的消費」の基準を満足させるものではない。そこで手作りの品物の不揃いな出来映えが、珍重されるようになる（p161-2）。手作り志向は、一見したところ、質実さを重んじている様にみえる。しかし、実はそれは、金銭的能力を誇示するための手の込んだやり方なのである。「こうしてあの、不完全さに対する称揚が始まった。ジョン・ラスキンやウィリアム・モリスは、この時代における、かかる傾向の熱烈な代弁者となったのである」（p162）。機械化が進む時代のなかで、人間らしい暮らしの基礎としての手仕事や家事の価値を見直し、それを出発点として新たな社会のあり方を構想しようとしたラスキンやモリスまでも、「誇示的消費」のアジテーターに仕立ててしまうのだ。ヴェブレンの暴露（de-bunking）戦術は、行き過ぎたものである。しかし、ラスキンやモリスの思想の実像は、そうではなかったにしても、彼らの主張が洗練された「誇示的消費」の手段として、当時の富裕層から好感をもって受け容れられた可能性は否定できないのである。NPOやNGO、さらには様々なボランティアを通しての環境や人権の問題についての取り組みが今日では活発になされている。しかし、そうした運動の担い手のなかに、確実な社会的承認の得られる先進的な活動を行う事で、自己を周囲の他者から「差別化」し、自尊心を得たいという動機が潜んでいる事も稀ではない。「手作り志向」に対するヴェブレンの辛らつな批評がもつ棘は、今日の「進歩的活動」に携わる人たちに対しても、突き刺さるものではないのか。

「金銭的文化」のなかでは、市場に出回っているすべての製品が、見栄の刻印を帯びている。そして見栄の文化を嫌悪し、それに背を向けたいと考える個人の思考でさえもが、そうした文化に深く侵されている。だから、彼が日々買い物、あるいは自らの手で作り出す品々でさえ、避けがたく「誇示的消費」の色調を帯びてしまうのである。「金銭的文化」の世界の住人は、どこまで行って

も見栄の刻印から逃れる事はできない。「ディオゲネスのように、名誉ある、あるいは浪費的な要素を排除すべしと主張する消費者は誰でも、現代市場のなかでは、そのもっとも些細な欲求すら満足させる事はできない」（p157）。「ディオゲネス的消費者の悲哀」もまた、高度消費社会を生きるわれわれが、日々直面する状況である。消費によって自己と他者とを差別化する。そうした日々の営みに疲れて、そこから降りようとしても、消費的な生き方に背を向けるライフスタイルを採用する事じたいが、すなわち他者との有効な「差別化」戦略に堕してしまう。われわれは、そんなパラドキシカルな時代のなかを生きているのである。

### （3）暴露戦術の陥穽—アドルノのヴェブレン批判

ヴェブレンの暴露の切れ味はかくも鋭い。しかし、その鋭さが孕む陥穽を、T. アドルノは指摘している。われわれの文化はすべて金銭的な見栄の動機に汚染されている。これがヴェブレンの文化攻撃の核心をなす命題である。われわれは高価なものを美と仰いでおり、従ってわれわれの文化は総体としてまがいのものだ。ヴェブレンは、文化のなかのキッチュを批判するのではなく、文化そのものが、その担い手の金銭的能力を誇示するための広告＝キッチュだという立場を取るものだ（Adorno 1941 訳107頁）。文化はわれわれの経験を意味づけ解釈する上での枠組みを与えるものである。もし、文化がニセモノであるとすれば、われわれの経験する美や幸福さえもが、ニセモノという事になりはしないだろうか。アドルノはヴェブレンの過激な文化攻撃に反論を試みている。様々なみせかけや制約によってくもらされているにはせよ、われわれは日々の暮らしのなかで、美や幸福をたしかに感じ取っている。人間が日々経験する美や幸福に対して、ヴェブレンのような冷笑的な態度を取るのであれば、それは恐ろしく残酷な結果を招来するのではないか。そんな危惧をアドルノは隠さない。「…しかし男性が実際に感じる幸福は『人目を引くための消費（ちく

ま学芸文庫版の訳文をそのまま用いた一筆者』と分離できない。どんな幸福も、社会的に構成された願望に実現を約束しないものはない。しかし、いかなる幸福といえども、その実現に際して（社会的に構成された願望とは一筆者）別なものを約束しないということはない。この点を取り違えた抽象的ユートピアは、幸福を打ち壊す破壊工作と化し、ユートピアを否定する暴力にこっそり賭けている」（前出111頁）。

今日の文化がトータルにニセモノであるとすれば、それは破壊にこそ価値しよう。また個人の経験する美や幸福がすべて、金銭的なものに汚染された虚偽的なものであるとすれば、個人の生活もまた、無意味なものになってしまう。虚偽にまみれ、かつ無意味な個人の生活などは、それを破壊しようという圧力が仮に生じたとしても、それと闘って守る必要などないではないか。ヴェブレンの論理は、文化の破壊と個人の抹消を黙認する危険性を孕んでいる。文化の破壊と個人の抹消とは、アドルノの母国を当時支配していた「野蛮」な勢力が、その支配下地域の人々に対して、まさに行った事ではなかったか。ヴェブレンは、アメリカの弱者の側に身を置いた、「ヒューマンな」思想家のはずであった。しかし、文化のすべてを金銭的な見栄に還元してしまう、資本主義文化に対するその過度の暴露戦術は、世界や人間の生に対する冷笑的な態度をもたらす。そうした冷笑的な態度こそが、狂った権力者の行う極限的に「インヒューマンな」行為をも、許容してしまう原因となるのではないか。アドバノの批判は鋭い。

アドルノの指摘した問題は、単に「暴露の過剰」といった次元を超えて、より根源的なヴェブレンの人間観に根をもつもののように思われる。ヴェブレンは、歴史の始まりと終わりにユートピアの存在を想定していた。未開段階において、人々は貧しい暮らしのなかでも利己心に支配される事なく、相互に親密で、平和愛好的な社会生活を営んでいた。そして、見栄の性向が完全に姿を消し、機械の理想が完全な勝利を収めた暁に、ユートピアは再び地上にもたらされる。そうヴェブレンは考えていた。未開人に戻るか、機械と一

体化するか。ヴェブレンのユートピア観を、このようにパラフレーズする事が可能であろう。これはいささか極端な評価なのかもしれない。しかし、いずれにせよ、ヴェブレンのなかには未開人と機械との中間にある、金銭的理想と野蛮な心性とに汚染された資本主義的文化—もしくは文化一般—への嫌悪感がある事は、否みがたいのである。

ここで筆者が、ヴェブレンとの対比において想起する思想家が、ジョージ・オーウェルである。オーウェルは、イギリス中産階級を支配していた「金銭的文化」を嫌悪して、名門イートン校を卒業しながらも大学には進学せず、ビルマの警察官やパリの裏町暮らしなど、旅と流浪の生活を続けてきた。おそらく、とりわけ青年期のオーウェルは、文化とは手の込んだ見栄の表示であり、野蛮人の虚飾の体系に過ぎないというヴェブレン的観点に、賛意を表したに違いない。しかし、中年以降の彼の中産階級的「金銭的文化」に対する評価は、両義的なものになっていく。第二次世界大戦後まもなく、彼は「イギリス的殺人の衰退」という名高いエッセイを書いている。イギリス人の好奇心をそそり、共感と呼んだ殺人には、一定の型があった。イギリス人の偏愛の対象となつたのは中産階級の男女が、その見栄と体面を保つために、やむなく行った凶行である。中産階級的な見栄と体面を保持しようとする性向は、殺害方法にも一定の節度をもたらし、殺人が限りなく残酷なものとなる事を防いでいた。しかし、大戦後、日曜新聞を賑わせる殺人事件はアメリカ的なそれに近づいていく。殺人の目的は金銭の獲得であり、そのためには手段を選ばない。爆弾でダンスホール一つを丸ごと吹き飛ばすというような、機械的で効率的な殺害方法が横行していく。オーウェルは、中産階級的な見栄が、殺人にさえある種人間的な彩りを添えていた「イギリス的殺人の衰退」を嘆き、金銭と合理性を絶対視するアメリカニズムが、戦後間もないイギリス社会のなかにも、早くも浸透してきた事に対して深い憂慮の念を表している（Orwell 1946）。

ガス室と原子爆弾。20世紀において「機械の理

想」は、恐ろしい殺戮をもたらした。全体主義と世界戦争を通過したオーウェルは、見栄や体面を重んじる心性は、たとえ愚かなものであったとしても、一切の感情を排して、目的達成のためのもっとも合理的な手段を採用するという「機械の理想」よりもよほど人間的で無害なものであるとして、是認する観点に到達している。文化とは、野蛮人の虚飾であるかも知れない。しかし、それは「機械の理想」がもたらす、「虚飾なき野蛮」よりもはるかに好ましい。「中産階級の見栄と虚飾」という、19世紀的・イギリス的野蛮は、「機械の理想」という20世紀的・アメリカ的野蛮より、よほど「品位」(decency)を備えている。そんな認識がオーウェルにはある。厳しいアメリカ批判者であったはずのヴェブレンは同時に、目的達成のためのもっとも合理的な手段の選択と、その非人格的・没感情的な遂行という、「機械の理想」を信奉する極めてアメリカ的な思想家でもあった。オーウェルとの対比によって、ヴェブレンのそんな一面が浮かび上がってくる<sup>(12)</sup>。

#### (4) 高度消費社会と「新しい中世」

池井が行ったヴェブレン批判の最後の部分には、説得力がある。今日の消費文化の主たる担い手が女性たちである事を想起するならば、「誇示的消費」を、家父長制的野蛮文化の残滓としてのみとらえるヴェブレンの視点は、もはや時代遅れの感を免れない。「誇示的消費」によって特徴づけられる高度消費社会の目的が、「ヨーロッパや日本の後期高度野蛮文化」への回帰にあるというような説は、誰の支持を受ける事もできないだろう。しかし、果たしてわれわれの世界は、高度な野蛮文化の段階へと回帰してはいないのだろうか。

冷戦終結後の世界秩序は、しばしば「新しい中世」と形容されている。EUのような超国家的主体が生まれ、他方多国籍企業やNPO,NGOのような、国境を自在に超えるトランスナショナルな主体の活動が重要性を帯びてくる。しかしその一方では、地域や種族・民族の自己主張も日増しに強まっている。かつては絶対的存在であった国民

国家は、よりグローバルな、あるいはよりローカルなライバルたちの成長によって相対化され、その政治的・経済的自己決定権を徐々に喪失しつつあるといっても過言ではない。この状況は、王権と教皇権、さらには都市や教会、ギルド等々、様々な権力主体が並び立っていた、ヨーロッパ中世とも比べうるものではないか。ポスト冷戦後の世界は、「新しい中世」とも呼ぶべき様相を示している。そうした議論は、今日の歴史学における、一つの流行とさえなっている。

作家の山口泉は、「新しい中世」ということばに、通常の議論とは若干異なる意味づけを行っている。冷戦終結後、世界的に貧富の格差は拡大し、ピラミッド型の階層的な序列構造が、世界のあらゆる領域のなかでみられるようになった。そして特に日本においては、政治・経済・文化・スポーツ等々のあらゆる分野で、「世襲」が何の批判を浴びる事もなく、公然となされるようになった。この「二世現象」が示す様に、この国のなかでの社会的地位は、相続されるべき「身分」と化し、階層の固定化は極限的に進行している。そしてフランス革命に端を発する、自由・平等・友爱等々の近代的諸権利は、いまや時代遅れの代物として嘲笑的となり、迷妄として斥けられようとさえしている。「社会はあらゆる位階と典礼に満ち、“分相応に生きる”ことが、とりもなおさず生あるものの至高の目的とも榮譽ともされる…」(山口 1994 83頁)時代。それが山口の言う「新しい中世」である。

冷戦後の世界においては、G7を頂点とし、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの最貧国を底辺とする世界のピラミッド構造は一層強化されていた。世界戦争の危機は去ったものの、世界は決して真の平和に覆われているのではない。ソロスやゲイツに代表される新たな金融と産業の「総帥」(captain)たちは、「金びか時代」の「泥棒貴族」と同様、詐術をも辞さずに、その巨富を築き上げた。IMF, WTO 体制は「公正な世界経済秩序」確立の美名の下に、もてる国(者)にのみ有利な金融と貿易のルールを打ちたてている。唯一の超大国と化したアメリカの世界支配のなか

で、国連決議を経る事のない私的制裁としての空爆が、頻々と行われてきたのである。ヴェブレンは、本質的には暴力と詐術とが支配していながらも、表面上の平和が保たれている「半平和」状態を封建制、あるいは中世を特徴づけるものとしたが、その観点に従えば、現代の世界はまさに「新しい中世」と呼ぶ他のない状況を示している。中世を支配したのは宗教的世界像であった。今日の先進諸国はカルトの猛威に覆われている。詐術、暴力、迷信。有閑階級がその文化的支配力によって社会に蔓延させる野蛮な思考習慣の解明も、『有閑階級』の一つのテーマであった。この小稿が主題とした、浪費と見栄の心性とともに、「詐術、暴力、迷信」の問題も重要な今日的意味をもつものであろう。しかし、もはや紙数も尽きてしまった。また稿を改めて、この問題を詳細に論じる事としたい。

## 脚 注

- (1) ヴェブレンの経済学方法論については、拙稿（小谷1988）を参照。
- (2) 西部（1983）は、興隆期のアメリカ・ビジネス文明に背を向けた反時代的思想家としてヴェブレンを位置付け、かつ細部に注目するなかから全体像を再構成していくヴェブレンの方法を、パースに由来する「記号論」と規定する事でヴェブレンを巧みに当時の流行の上に乘せていった。
- (3) 19世紀的・イギリス的資本主義と、20世紀的・アメリカ的資本主義という対比は、（関1985）に負っている。
- (4) アメリカの地理的な広大さは、この国にとっての悩みの種であると同時に、大きなビジネスチャンスの源泉となってきた事も否めない。広大な国土を結びつけるための鉄道事業は、その顕著な事例である。また近年のIT革命がアメリカにおいて最も急速に進んだ背景にあるものとして、広大な国土のなかでのより迅速で効率的な情報伝達に対するアメリカ人の高い関心を指摘しなければならないだろう。
- (5) クーリーは、人間性を善きものと捉えており、その意味では例えばオーストラリア原住民もアメリカ人と差異のない事を訴えていた。しかし、かかるクーリーの議論は、ミードの厳しい批判にあう。クーリーの言う「善き人間性」（女性に優しい。民主的等々）は、アメリカ的徳目の言い換えに過ぎず、その論理によってはアメリカ的な価値観を超えた他者（アメリカに当時流入しつつあった少数者＝移民たち）を擁護する事はできない。その意味でクーリーの議論は、「アメリカ共同体の弁明」である（Mead 1931, 小谷1989）。
- (6) ヴェブレンの言う「野蛮文化」の時代は、原始的な遊牧社会から、古代奴隷制度を経て、封建時代にまで至る、途方もなく長い期間を意味している。人類は歴史時代の大半を野蛮文化のなかで過ごしてきたために、われわれの文化は本当の意味で、その拘束力から抜け出しではない。これがヴェブレンの主張である。
- (7) ミードは「アメリカ共同体の弁明」とクーリーの社会理論を切り捨てた。しかし、そのミードにも「話想宇宙」（universe of discourse）という概念がある。世界的な交通と通信の拡大のなかで、共通の反応を人々に引き起こす「有意味シンボル」（significant symbol）が共有され、その事によって理性的な討議が世界大のスケールでなされる状況をミードは理想としたのである。「話想宇宙」の像は、ウイルソン大統領の構想した国際連盟に対応するものであろう。「話想宇宙」というヴィジョンのなかには、理性的で民主的な討論によって社会は統治されるべきであり、またそれは可能であるという、アメリカ民主主義の理想が深く刻印されている。
- (8) 神人同形説的宗教のなかで、神は地上の権力者とよく似た姿をとっていた。僧侶たちは、神の召使である。金がかかっていて、ゴテゴテした装飾が施されているが、少しも本

人の快楽に供するところのない服装は、まさしく彼が召使である事を証明している (p120—1)。

- (9) 西欧諸国の民族衣装はそれほど浪費的ではなく、醜悪でもない。美に関して人間は、どんどん堕落を続けている。「他方、二千年前に流行していたスタイルの方が、現在のもっとも洗練され、骨を折って作られた作品より、はるかに見栄えがするという主張を、何の矛盾もなく行う事ができるのだ」(p 175)。
- (10) 「ヴェブレンは多くのものをイプセンと共有しており、おそらく婦人問題を放棄させることのできない最後の大物思想家である」(Adorno1941 訳112頁)。
- (11) 特権階級が存在が不可視のものとなった時に、彼らをもつ巨大な権力を指摘した。この点にミルズの偉大さはある。
- (12) オウエルはしばしば全体主義とともに、アメリカ的なものへの嫌悪をあらわにしているが、スターリンがアメリカ人の合理性や目的達成への強固な意志力を称揚したというエピソードを想起するならば、アメリカ的なものと全体主義とを半ば同一視したオウエルの視点は、あながち的外れなものだとは言えないだろう。

## 参考文献

『有閑階級の理論』原著は、“The Theory of the leisure Class” 1899 (Augustus M. Kelly, Book-seller New York 1975) を用いた。本書にはこれまでも多くの邦訳が刊行されている。そのなかでも、小原敬士訳の岩波文庫版 (1961年刊) と高哲男訳ちくま学芸文庫版 (1998年刊) をとりわけ参照させていただいた。記して謝意を表したい。本文引用のなかで ( ) に書名のないものは、『有閑階級』からの引用である。

Adorno. T. 1941 Veblen's attack on culture (1996 渡辺祐邦 三原弟平訳『プリズメン文化

批判と社会』 ちくま学芸文庫)

池井望 「誇示的消費—現代文化を学ぶ人のためのキーワード」井上俊編『新版 現代文化を学ぶ人のために』世界思想社

Hobsbawm. E. J. 1994 “Age of Extremes: The Short Twentieth Century”(1996 河合秀和訳『20世紀の歴史 極端な時代』上・下 三省堂)

小谷敏 1988 「進化・行動・思考習慣—ヴェブレン研究序説」『地域総合研究』第16巻1号

—— 1989 「G. H. ミードとアメリカ社会」片桐雅隆編『意味と日常世界』世界思想社

Mead. G. H. 1931 “Cooley's contribution to American Social Thought” A. J. S

Mills. C. W. 1956 “The Power Elite” Oxford Univ. Press (1969 鶴飼信成 綿貫譲治訳『パワーエリート』東京大学出版会)

西部邁 1983 『経済倫理学序説』中央公論社

Orwell 1946 “The Decline of English Murder”(1971 鶴見俊輔訳『右であれ左であれわが祖国』平凡社)

Riesman. D. 1950 “The Lonely Crowd” (1960 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房)

—— 1953 “Thorstein Veblen A Critical Interpretation” The Seabary Press

作田啓一 1973 『深層社会の点描』筑摩書房

関曠野 1985 『資本主義—その過去・現在・未来』影書房

Veblen. T. 1998 “Why is Economics not an Evolutionary Science” The Quarter journal of Economics vol. Xii July

山口泉 1994 『新しい中世がやってきた』岩波書店